

ドイツ語の心理動詞における語彙化について

野上 さなみ

1. はじめに

本稿¹は、喜び・悲しみ・怒り・不安などの感情を表現する心理動詞において、複数の意味論的
概念が動詞として語彙化されるにあたり、語彙化の在り方にどのような特徴があるのかを考察するこ
とを目的とする。まず第 2 節で心理的な事象の語彙化のパターンを多様化している要因について
簡潔に述べ、第 3 節では統語的な面からドイツ語の心理動詞を分類する。この分類に基づき第 4
節では、語彙化の在り方の多様性について、さらに意味論的な側面からも考察を進める。第 5 節で
は 3 言語を対照しながら、心理的な事象が動詞として語彙化される際のパターンを探る。なお、論
全体を通してドイツ語の例に関しては、再帰代名詞が対格となっている例だけを取り扱う。動詞例
の収集にあたり、伊吹(1981)、国松(2000)、田村(2005)、目黒(2000)、ルビオ(2004)、高塚
(1990)、宮城&山田(1990)、ヘルビヒ&ブッシャ(2006)を参考にした。

2. 心理的な事象の特徴

心理的な事象は、感覚の所有者 Experiencer (EXP) と、感覚を引き起こす刺激 Stimulus (STM)
という 2 つの対象の間に存在する事象である。まず、EXP という意味論的役割が備え持つ 2 つの側
面について詳しく考察しておきたい。KEMMER (1993:p.129) は、出来事に関与する対象の数が
1 つであっても 2 つであっても、EXP は心理的出来事の流れにおいて、起点 Initiator と終点
Endpoint の両方として機能することに言及している：

“In both the two-participant and one-participant mental events, the Experiencer is at
both ends of a relational arc. It is an Initiator in that the mental event originates within the
mind of the Experiencer, and an Endpoint in that the Experiencer is affected (mentally).”

まず EXP は感覚を有するもの、すなわち「感覚の発生源」であるがゆえに、「出来事の起点」と
して解釈できる。これと同時に刺激の影響を受ける「被り手」でもあるため、「出来事の終点」として
も解釈され得ると言える。第 3 節で述べるとおり、ドイツ語の心理動詞には統語的構造だけ見ても
4 つの用法がある。心理的事象の叙述をこのように多様なものになっている原因は、EXP が出来事
全体の起点／終点という 2 つの解釈の可能性を持つことにあると考えることができる。この EXP の

二面性を踏まえれば、EXP が備える終点としての性質が強調される場合には STM が起点として解釈され、逆に EXP の起点としての性質が強調されれば、STM が終点として解釈されることになる。本論では、EXP と STM の 2 つの役割のうちどちらが起点／終点として把握されるのかによって出来事全体を捉える視点が変化するという考え方に基づいて考察を進めていく。

3. ドイツ語心理動詞の統語的構造

ドイツ語の心理表現に関わる動詞を分析するにあたって、これらの動詞に備わっている用法を、その統語的特徴を基準として、以下の 4 つのグループに分類した：

I. 自動詞用法 II. 他動詞用法 III. 再帰用法 IV. 非人称用法

II と III はどちらも他動詞としての構造であることに変わりはないが、本稿では、主語名詞句と直接目的語名詞句の指示対象が同一ではない場合には「他動詞用法」とし、両者が同一の対象を指示する場合、すなわち直接目的語が再帰代名詞である場合には「再帰用法」と呼んで区別する。IV は自動詞である場合と他動詞である場合の両方があり得るが、一括して非人称用法とする。なお、本稿では再帰代名詞 *sich* が対格である例のみを取り扱う。4 つのグループの具体例を示す：

erschrecken (驚愕する、驚愕させる)

- | | | |
|------|--|-----------------------------|
| I. | Sie <i>erschrak</i> bei dieser Nachricht. | 彼女はこの知らせを聞いてぎくりとした。 |
| II. | Der Anblick <i>erschreckte</i> mich. | その光景は私を驚かせた。(その光景を見て私は驚いた。) |
| III. | Ich <i>erschreckte mich</i> , als ich sie sah. | 彼女を見た瞬間、私はぎよつとした。 |
| IV. | — | 非人称構造は持たない。 |

動詞 *erschrecken* の場合、自動詞として用いられる場合 (I) には不規則変化をし、他動詞として機能する場合 (II・III) には規則変化をすることからも、自動詞と他動詞の 2 用法の区別を明確に確認することができる。次に挙げる動詞 *ekeln* は、自動詞用法以外のすべてを備えている。非人称用法には、自動詞・他動詞両方の用法が備わっている。また、動詞 *begeistern* のように、2 つの用法しか持たない動詞も数多くあるし、単一の用法しか持たない動詞もある：

ekeln (吐き気を催すほど大嫌いである)

- | | | |
|------|--|--------------------------------|
| I. | — | 非人称用法の自動詞以外は持たない。 |
| II. | Der Geruch <i>ekelt</i> mich. | この匂いは私に吐き気を催させる。(私はこの匂いが大嫌いだ。) |
| III. | Ich <i>ekele mich</i> vor der Stadt. | 私はこの街がたまらなく嫌である。 |
| IV. | Es <i>ekelt mir/mich</i> vor diesem Leben. | 私はこの生活が嫌でたまらない。(自・他動詞用法) |

begeistern (魅了する)

- II. Die Musik *begeisterte* die Kinder. その音楽は子供達を魅了した。
- III. Die Kinder *begeisterten sich* für die Musik. 子供達はその音楽に魅了された。
- I.とIV.は備えていない。

さらに、*drohen* と *bedrohen* のように共通の語幹を持ち、「脅す」という共通の意味を備えているにも関わらず、それぞれが自動詞用法と他動詞用法のどちらか一方しか持たない例もある。心理的圧迫を受ける相手が I では与格によって、II では対格によって表されている：

drohen (脅す)

- I. Er *drohte mir* damit, mich zu entlassen. 彼はクビにすると行って私を脅した。
- II. III. IV. は備えていない。

bedrohen (脅す)

- II. Sie *bedrohte mich* mit der Pistole. 彼女は私をピストルで脅した。
- I. III. IV. は備えていない。

このように、心理を表現するという共通点を持ちながらも、4 つの用法のうちどれを備えているのかには動詞によってばらつきがあるため、まず各動詞についてこれら 4 用法の有無を調査した。この結果をもとに、まずは心理動詞において「名詞句の担う意味論的役割」と「統語的構造」の間にどのような関係があるのかを第 4 節で明らかにしていくことにする。

4. 心理動詞における「名詞句の意味論的役割」と「統語構造」

名詞句の担う意味論的役割のうち、心理・感覚を引き起こす刺激を「STM」(Stimulus)、心理・感覚の受容者を「EXP」(Experiencer)と表記し、統語的には主格名詞句を NOM(Nominativ)、対格名詞句を AKK(Akkusativ)、動詞を V、前置詞句を PP(Präpositionale Phrase)と表記して、各動詞群の特徴を探る。

4.1 「自動詞用法」における特徴

自動詞用法しか持たない心理動詞群について、主格で現れる主語名詞句の意味論的役割が STM であるか EXP であるかを基準に分類すると、主語名詞句が EXP である例が大半を占める。他の用法も併せ持つ動詞の自動詞用法においても、主語名詞句はすべて EXP となっていた。これらの例から、「I. 自動詞用法」に関しては、それが動詞の持つ唯一の用法であるかどうかに関わらず、EXP を主語名詞句とする傾向が極めて強いことが分かる。具体例を以下に挙げる：

- ① NOM^{STM} (用法 I のみ)： *drohen* (脅す), *gefallen* (気に入る)
- ② NOM^{EXP} (用法 I のみ)： *trauen* (信じる), *trauern* (悲嘆する), *vertrauen* (信じる),
verzweifeln (絶望する), *zögern* (躊躇する), *zweifeln* (疑う)

- ③ NOM^{EXP} (他用法あり): *erschrecken* (驚愕する), *fürchten* (恐れる), *jammern* (嘆く),
leiden (苦しむ), *sorgen* (気遣う)

4.2 「他動詞用法」における特徴

他動詞用法しか持たない心理動詞は、主語名詞句が STM である動詞①と EXP である動詞②という 2 つのグループに下位区分できる。この 2 グループを図式化すると、名詞句の担う意味論的役割だけが入れ替わる形になっていることが、はっきりと確認できる。具体例も併せて示す:

- ①主語名詞句が STM: 【NOM^{STM} V AKK^{EXP}】
②主語名詞句が EXP: 【NOM^{EXP} V AKK^{STM}】

- ① NOM^{STM}: *abschrecken* (威嚇する), *bedrohen* (脅す), *beleidigen* (侮辱する),
beschämen (恥入らせる), *bestürzen* (狼狽させる), *deprimieren* (意気消沈させる),
enttäuschen (落胆させる), *irritieren* (苛立たせる), *jammern* (哀れに思わせる),
schockieren (ショックを与える), *verwirren* (狼狽させる)
- ② NOM^{EXP}: *befürchten* (危惧する), *bejammern* (嘆く), *bemerkten* (気づく), *beneiden* (妬む)
bereuen (後悔する), *betrauern* (悼む), *bewundern* (賛美する), *bezweifeln* (疑う),
genießen (楽しむ), *hassen* (憎む), *lieben* (愛する), *respektieren* (尊敬する),
verdächtigen (疑う)

4.3 「他動詞用法」と「再帰用法」の交替における特徴

このセクションでは、「II. 他動詞用法」と「III. 再帰用法」の両方を持ち合わせている動詞群に焦点を当てる。この動詞群における 2 つの用法の特徴は、「名詞句の担う意味論的役割」と「統語的構造」をめぐって特定の交替現象が認められる点にある。主語になる名詞句が心理・感覚の引き起こし手「STM」である場合には受容者「EXP」を直接目的語とする他動詞用法が用いられ、「EXP」が主語になる場合には、STM が前置詞句内部に現れる再帰用法が用いられる。前者の場合には STM が、後者の場合には EXP が出来事全体の起点としてとらえられている:

Meine Äußerung^{STM} *ärgerte* ihn^{EXP}. 私の発言は彼を怒らせた。
Er^{EXP} *ärgerte* *sich* _{pp}【über meine Äußerung^{STM}】. 彼は私の発言に怒った。

このように主語名詞句の意味論的役割に応じて、統語的に 2 つの用法が使い分けられている。このタイプの動詞群を【A】とし、2 つの用法を図式化すると次のようになる:

動詞群【A】	他動詞用法	【 <u>NOM</u> ^{STM} V <u>AKK</u> ^{EXP} 】
	再帰用法	【 <u>NOM</u> ^{EXP} V <i>sich</i> _{pp} 【 <u>NP</u> ^{STM} 】】

さらに一見したところ、これと同一の統語的組換えが起こっているように思われるけれども、各名詞句が担う意味論的役割が異なるもう 1 つの動詞群がある。動詞群【A】では統語構造の組み替えに伴って、名詞句の意味論的役割も必ず入れ替わっている。これに対して次に紹介する動詞群【B】では、たとえ統語構造を組み替えても、主語名詞句が担う意味論的役割は、2つの用法を通じて一貫して EXP に留まっている。つまり、出来事全体の起点は常に EXP に固定されている：

Das Kind^{EXP} fürchtet den Tod^{STM}.
Das Kind^{EXP} fürchtet sich pp【vor dem Tod^{STM}】. その子供は死を恐れている。

動詞群【B】の「統語的構造」と「名詞句の意味論的役割」を図式化したものを以下に示す：

動詞群【B】	他動詞用法	【 <u>NOM</u> ^{EXP} V <u>AKK</u> ^{STM} 】
	再帰用法	【 <u>NOM</u> ^{EXP} V sich pp【 <u>NP</u> ^{STM} 】】

動詞群【A】と【B】の相違点を簡潔にまとめると次のようになる。「他動詞用法」と「再帰用法」の間で統語構造上の組換えが起こる際に、【A】では主語名詞句と前置詞句内の名詞が担う意味論的役割に STM/EXP の交替がある。これに対して、【B】では主語名詞句の役割は一貫して EXP のまま固定されている。【A】、【B】群の例を以下に示す：

動詞群【A】: *amüsieren* (楽しませる), *ängstigen* (不安がらせる), *ärgern* (怒らせる), *aufregen* (興奮させる), *begeistern* (魅了する), *belustigen* (楽しませる), *beruhigen* (落ち着かせる), *beschäftigen* (~を占める), *freuen* (喜ばせる), *interessieren* (興味をひく), *kümmern* (心を煩わせる), *langweilen* (退屈させる), *wundern* (いぶかしがらせる)

動詞群【B】: *bedauern*(後悔する、詫びる), *fürchten*(恐れる)

4.4 「非人称用法」における特徴

非人称用法 5 例のうち、非人称用法しか持たない動詞は見当たらず、並行して必ず他動詞用法を備えていることが共通点である。さらに、非人称用法において属格で現れる名詞句、あるいは前置詞句内部に現れる名詞句は、STM の役割を担っている：

- | | | | | | |
|---|----|---------|----------------------------|--|------------------|
| ① | Es | ärgert | <u>mich</u> ^{EXP} | pp【 <u>über ihn</u> ^{STM} 】. | 私は彼に腹がたつ。 |
| ② | Es | ekelt | <u>mich</u> ^{EXP} | pp【vor <u>diesem Leben</u> ^{STM} 】. | 私はこの生活が嫌でたまらない。 |
| ③ | Es | jammert | <u>mich</u> ^{EXP} | GEN【 <u>des Volks</u> ^{STM} 】. | 私はこの群衆がかわいそうである。 |
| ④ | Es | reut | <u>mich</u> ^{EXP} | GEN【 <u>dieser Tat</u> ^{STM} 】. | 私はこの行為を後悔している。 |
| ⑤ | Es | leidet | <u>mich</u> ^{EXP} | nicht mehr pp【 <u>am Tisch</u> ^{STM} 】. | 私はもう机に向かっている。 |

さらに、これらの動詞の他動詞用法では、⑤を除いてこのSTMを主語名詞句とした文が成立する：

- | | | | | |
|----|------------------------------------|---------|-------------------------|-----------------|
| ①' | <u>Er</u> ^{STM} | ärgert | <u>mich</u> . | 彼が私を怒らせる。 |
| ②' | <u>Dieses Leben</u> ^{STM} | ekelt | <u>mich</u> . | この生活が私に嫌気を起こす。 |
| ③' | <u>Das Volk</u> ^{STM} | jammert | <u>mich</u> . | この群衆は私に憐れみを起こす。 |
| ④' | <u>Diese Tat</u> ^{STM} | reut | <u>mich</u> . | この行為は私を後悔させる。 |
| ⑤' | *Der Tisch | leidet | <u>mich</u> nicht mehr. | — |

ここで「STM という意味論的役割が、どの名詞句によって実現されるか」ということに焦点を絞って考察してみよう。非人称用法 ①～④ と他動詞用法 ①' ～ ④' の間に見られる名詞句の役割交替は、3.3 の動詞群【A】で取り扱った他動詞用法と再帰用法の間に確認できた交替と強い類似性を示している。ここで、他動詞用法、再帰用法、非人称用法の各用法には、出来事の語彙化における異なる 3 つの視点が反映されていると仮定してみると、どの意味論的役割を担う対象を「出来事の起点」と捉えるかによって選択される統語的構造が異なる、と考えることができる。

まず他動詞用法では、STM を出来事の起点と捉えて STM→EXP という流れで出来事が進む視点が選択され、STM を主語、EXP を直接目的語として出来事全体が語彙化されている。この他動詞用法とは逆に、再帰用法では EXP を主語とすることにより、EXP を出来事の起点として捉える視点が明確に示される。これら 2 つの用法に対して非人称用法では、主語名詞句の位置に非人称主語 *es* を置くことで、EXP と STM のどちらが出来事の起点であるのかは曖昧なままとなり、「EXP と STM の間に特定の心理的關係が存在すること」が叙述される形を取っている。しかし、非人称の構造においては、再帰用法で用いられる統語的構造の原型が出来上がっているため、非人称構造の主語名詞句としての *es* に代わって EXP を置くことができれば再帰用法が実現し、EXP が起点となる現象として出来事全体を捉える視点が提供される。

以上の考察より、出来事全体を把握する際に起点として選択される名詞句を巡って、非人称用法は他動詞用法と再帰用法の 2 つの用法の中間に位置すると理解することができ、非人称主語に代わる主語名詞句として EXP/STM のどちらを選択するかによって、再帰用法と他動詞用法のどちらにも流動的に切り替えが可能な構造であると言える。交替関係にある再帰用法と他動詞用法、そして非人称用法のそれぞれが提供する視点の間にある関係を図式的に記述したものが図 1 である。

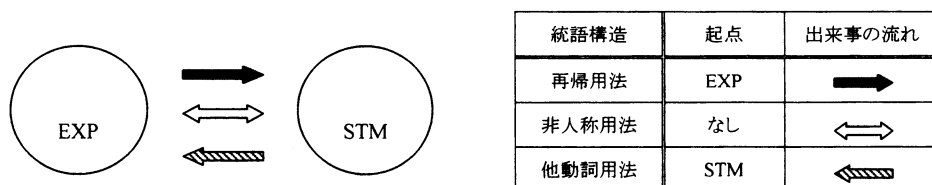


図 1：心理動詞における 3 つの視点

4.5 再帰用法しか持たない心理動詞

自動詞・他動詞・非人称用法を並行して持たず、もっぱら再帰用法でしか用いられないことがない動詞群は、Duden (2009: p.402) では *lexikalische Reflexiva* (語彙的再帰動詞) と呼ばれ、再帰代名詞とともに用いられる動詞類の中で最も語彙化が進んだタイプの再帰動詞として紹介されている。また、Kaufmann (2003: p.137) は再帰代名詞を伴った形でしか用いられない動詞群を *inhärent reflexive Verben* (内在的再帰動詞²) と呼び、感情・知覚・運動を表す動詞がここに含まれることを指摘している。再帰用法しか持たない動詞群を【R】として以下に示す:

動詞群【R】: *bedanken* (感謝する), *begnügen* (満足する), *besinnen* (思案する、思い出す), *entsinnen* (思い出す), *gedulden* (辛抱する), *schämen* (恥じる), *verlieben* (恋する), *weigern* (拒否する), *zufriedengeben* (満足する)

これらの動詞は 4.3 の動詞群【A】とは異なり、再帰用法と他動詞用法の交替は認められない、つまり STM を主語とする他動詞用法を持たない:

<u>Ich</u> ^{EXP} schäme mich für <u>mein Kind</u> ^{STM} . →	* <u>Mein Kind</u> ^{STM} schämt mich.
私はわが子のことが恥ずかしい。	わが子が私に恥ずかしい思いをさせる。
<u>Ich</u> ^{EXP} bedanke mich für <u>Ihre Hilfe</u> ^{STM} . →	* <u>Ihre Hilfe</u> ^{STM} bedankt mich.
私はあなたの助力に感謝します。	あなたの助力は私に感謝の念を起こさせる。

したがって、「STM が EXP に心理的事象を引き起こす」という使役構文としての他動詞から再帰動詞が派生しているわけではないことが確認できる。また 4.3 の動詞群【A】の場合も、たしかに他動詞用法と再帰用法の間に交替が見られるけれども、この 2 つの用法は共起する形で使用することはできない。つまり、主語名詞句とは異なる対象を指示する名詞句と主語名詞句と同一の対象を指示する再帰代名詞の両方を、直接目的語として並列した文は無効となる。したがって、動詞群【A】の再帰用法も、使役の意味を持つ他動詞から派生した再帰動詞ではなく、再帰代名詞は意味論的役割を持たない、と大矢 (2008, p.198-199) は指摘している:

*Der Musiker amüsierte <u>sich und die Leute</u> .	その音楽家は楽しみ、人々も楽しませた。
*Ich freue <u>mich und meine Gäste</u> .	私は喜び、客人も喜ばせた。

動詞群【R】には STM を起点とした視点に基づく他動詞用法や、EXP/STM のどちらにも起点を置かない視点に基づいた非人称用法は備わっておらず、語彙化の際に用いることができる視点は、あくまでも「EXP を起点とする」という制約を受けていることになる。

5. 他言語における心理動詞の語彙化

本節では、26 のシチュエーションを叙述するドイツ語の心理動詞と、これに対応するフランス語とスペイン語の動詞を対照する形で、各言語での心理動詞における語彙化の在り方を確認する。対象とするのは、4.3 で扱った動詞群【A】と【R】、および意味の上でこれらに対応するフランス語とスペイン語の動詞である。さらに、主語名詞句が EXP である場合に選択される用法に焦点を当てるため、再帰用法を持たない他動詞や自動詞もいくつか含まれる。第 4 節での分類に沿い、他動詞用法と再帰用法の間で主語名詞句に EXP/STM の交替が見られる動詞を【A】、再帰用法しか持たない動詞を【R】³、さらに他動詞を【T】、自動詞を【I】とし、結果を示したものが表 1 である。

全 26 のシチュエーションのうち、3 つの言語に共通して【A】が用いられるものが 11 例あり、全体の約 4 割程度を占めていて、このパターンの語彙化が心理動詞における大きな特徴の 1 つと言えそうである。3 言語共通で【R】を用いているのは 1 例(13. 思い出す)だけで、さらに他動詞【T】も 1 例(5. 許す)のみにとどまっている。各言語に注目すると、【R】によって叙述されるシチュエーションがドイツ語には 8 例、フランス語には 7 例含まれているのに対して、スペイン語は 2 例にとどまっている点も興味深い。再帰代名詞を二重下線で示して具体例をいくつか挙げておく。

13. 思い出す: *sich entsinnen* / *se souvenir* / *acordarse* には STM を起点とする他動詞用法はなく、EXP が主語となり再帰代名詞が伴う。

- | | | |
|-----|---|-------------------|
| (D) | <u>Ich</u> ^{EXP} kann <u>mich</u> noch an den Tag entsinnen. | 私はまだあの日のことを覚えている。 |
| (F) | <u>Je</u> ^{EXP} ne <u>me</u> souviens pas qu'il soit venu. | 私は彼が来たことを覚えていない。 |
| (S) | <u>Acuérdate</u> de llamarme mañana. | 明日私に電話するのを忘れないで。 |

14. 落胆する: *enttäuschen* / *se décourager* / *desanimarse* の場合、ドイツ語の動詞 *enttäuschen* は STM を主語、EXP を直接目的語名詞句とする他動詞である。EXP を主語とする場合には、通常例文(D)①のように *sich fühlen* (～な気持である)に過去分詞として組み合わせるか、②のように状態受動の形が使われ再帰用法は持たない。これに対して、フランス語とスペイン語では、他動詞用法に加えて再帰用法による EXP を起点とした叙述が可能となっている:

- | | | |
|-----|---|---------------------|
| (D) | ① <u>Ich</u> ^{EXP} habe mich <u>enttäuscht</u> gefühlt. | 私はがっかりと感じた。 |
| | ② <u>Ich</u> ^{EXP} bin <u>enttäuscht</u> . | 私は落胆している。 |
| (F) | ① <u>Cet échec</u> ^{STM} a <u>découragé</u> <u>Paul</u> ^{EXP} . | この失敗はポールを落胆させた。 |
| | ② <u>Il</u> ^{EXP} <u>se décourage</u> au <u>premier obstacle</u> ^{STM} . | 彼は最初の障害でがっかりしてしまう。 |
| (S) | ① <u>La noticia</u> ^{STM} <u>desanimó</u> a <u>los familiares</u> ^{EXP} . | 知らせを聞いて親戚たちはがっかりした。 |
| | ② <u>Se</u> <u>desanimó</u> al <u>oír las noticias</u> ^{STM} . | 彼はその知らせを聞いてがっかりした。 |

(主語^{EXP}は省略されている。)

23. 恋をする *sich verlieben* / *s'énamourer* / *enamorarse* では、他動詞用法と再帰用法の両方を備えているのはスペイン語だけで、ドイツ語もフランス語も再帰用法しか持たない:

- (D) ① Er^{EXP} verliebte sich in die Witwe^{STM}. 彼は後家さんに惚れた。
 ② *Die Witwe^{STM} verliebte ihn^{EXP}. 後家さんは彼に恋心を起こさせた。
- (F) ① Jean^{EXP} s'est enamouré d'une veuve^{STM}. ジャンは後家さんに惚れた。
 ② *La veuve^{STM} a enamouré Jean^{EXP}. 後家さんはジャンに恋心を起こさせた。
- (S) ① Se ha enamorado de José^{STM}. 彼女はホセに恋をした。(主語^{EXP}は省略されている。)
 ② La^{EXP} enamoró su voz dulce^{STM}. 彼の甘い声に彼女は恋心をそそられた。

6. まとめ

心理的事象を叙述する動詞の語彙化においては、名詞句の意味論的性質と選択される統語構造の組合せ方により複数のパターンが見られる。語彙化パターンを多様にしている要因は、出来事全体の起点／終点のどちらにも解釈できる EXP の二面性である。さらに他言語との対照で、同一のシチュエーションでも語彙化パターンには言語によりかなりの相違があること、逆に3言語に共通して特に選択されやすい語彙化パターンがあることも確認できた。分析対象をさらに増やすことで、語彙化の特徴をより詳細に示すことを目指したい。

《注》1: 本稿は、科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)の支援を受けた研究「ドイツ語動詞の語彙化と動詞範疇の連動について」に基づくものである。2: 日本語訳については、大矢(2008)を参照のこと。3: フランス語の場合、田辺(2007:p.240)が指摘するように「常に代名動詞としてしか用いられない動詞」がある一方で、再帰代名詞*se*と他動詞を組み合わせることで、他動詞単独の場合とは異なる意味が発生するものが多数ある。朝倉(2002:p.551)は「これらの代名動詞の意味は単一形の意味からは説明しにくい。したがって、再帰代名詞は真の目的語ではなく、(se + 他動詞)の組合せから新しい意味を持つ動詞ができたものと考えられる」と述べている。この考えに従い、(se + 他動詞)の組合せが他動詞単独の場合とは異なる意味を持つ場合には、再帰用法しか持たない動詞として捉えることにする。

参考文献

- 朝倉季雄(2002): 新フランス文法事典、白水社
 伊吹武彦ほか(編)(1981): 仏和大辞典、白水社
 C.ルビオほか(編)(2004): クラウン和西辞典、三省堂
 大矢俊明(2008): ドイツ語再帰構文の対照言語学的研究、ひつじ書房
 国松孝二(編)(2000): 独和大辞典(第2版)、小学館
 高塚洋太郎ほか(編)(1990): コンコルド和仏辞典、白水社
 田辺貞之助(2007): フランス文法大全、白水社
 田村毅ほか(編)(2005): ロワイヤル仏和中辞典(第2版)、旺文社
 G.ヘルビヒ & J.ブッシュヤ(2006): 現代ドイツ文法(新装版)、三修社
 宮城昇 & 山田善郎(監修)(1990): 現代スペイン語辞典、白水社
 目黒士門(2000): 現代フランス広文典、白水社

Kaufmann, Ingrid (2003): Reflexive Verben im Deutschen, In: L. Gunkel & G. Müller & G. Zifonun
 (hrsg.): *Arbeiten zur Reflexivierung (Linguistische Arbeiten 481)*, Niemeyer, Tübingen
 Kemmer, Susanne (1993): *Middle Voice*, John Benjamins, Amsterdam/Philadelphia
 Dudenredaktion (hrsg.) (2009): *Duden Band 4, die Grammatik*, Dudenverlag, Mannheim

表 1 : ドイツ語・フランス語・スペイン語における心理動詞の語彙化パターン

	日本語訳	ドイツ語	フランス語	スペイン語
1	楽しむ	sich amüsieren [A]	◆ ¹ se amuser [A]	divertirse [A]
2	不安がる・心配する	sich ängstigen [A]	s'inquiéter [A]	inquietarse [A]
3	怒る	sich ärgern [A]	s'emporter [R]	enfadarse/enojarse [A]
4	興奮する	sich aufregen [A]	se exciter [A]	excitarse [A]
5	許す	entschuldigen [T]	excuser [T]	disculpar [T]
6	魅了される	sich begeistern [A]	se fasciner [A]	fascinarse [A]
7	面白がる(楽しむ)	sich belustigen [A]	se divertir [A]	divertirse [A]
8	感謝する	sich bedanken [R]	remercier [T]	agradecer [T]
9	満足(我慢)する	sich begnügen [R]	se contenter [A]	contentarse [A]
10	後悔する	bereuen [T]	se repentir [R]	arrepentirse [R]
11	落ち着く	sich beruhigen [A]	se calmer [A]	calmarse [A]
12	専念・没頭する	sich beschäftigen [A]	s'adonner [R]	dedicarse [A]
13	思い出す	◆ ² sich entsinnen [R]	se souvenir [R]	acordarse [R]
14	落胆する	enttäuschen [T]	se décourager [A]	desanimarse [A]
15	喜ぶ	sich freuen [A]	se réjouir [A]	alegrarse [A]
16	辛抱して待つ	sich gedulden [R]	◆ ³	◆ ⁴
17	興味をもつ	sich interessieren [A]	s'intéresser [A]	interesarse [A]
18	案ずる・心配する	sich kümmern [A]	se préoccuper [A]	preocuparse [A]
19	信用しない	mißtrauen [I]	se méfier [R]	desconfiar [I]
20	退屈する	sich langweilen [A]	s'ennuyer [A]	aburrirse [A]
21	恥じる	sich schämen [R]	rougir [I]	avergonzarse [A]
22	驚く	sich erschrecken [A]	s'étonner [A]	extrañarse [A]
23	恋をする	sich verlieben [R]	s'énamourer [R]	enamorarse [A]
24	拒否する	sich weigern [R]	se refuser [B]	negarse [B]
25	いぶかしがる	sich wundern [A]	se demander [R]	extrañarse [A]
26	満足(我慢)する	sich zufriedengeben [R]	◆ ⁵ se satisfaire [A]	satisfacerse [A]

◆1: 他に se divertir [A]/ se plair [R]などの表現もある。◆2: sich besinnen [R]という表現もある。◆3・◆4: 該当する適切な動詞が見出せなかったためこのたびは空欄にしてある。◆5: se louer [R]という表現もある。